

M氏の暮らすA市には、地元のシンボルとなる沼があります。

その沼は、昭和初期は豊富な水が湧き、透き通って底が見えるほど澄んでいたため、漁師は沼に漁にでるとき、弁当は持参しても水筒は持つていかなかったそうです。

水深が浅いことから水生植物の宝庫であると共に、ウナギやワカサギなどの魚が生息し、水鳥や渡り鳥が飛び交う豊かな自然が広がっていました。子供たちが水遊びをする姿も見られ、様々な生物や人々にとつて、その沼はかけがえのない存在だったといえます。

ところが、昭和三十年代後半から大規模な干拓によって沼の面積が約半分になり、沼の自浄能力が弱まってしまったのです。都市化の波で人口が急速に増加したことからも、大量の生活排水が沼に流れ込むようになり、水質が悪化していきました。

昭和四十年代後半以降、水の汚濁の値を示すCOD（化学的酸素要求量）は急激に上昇しました。沼が閉鎖性の水域であることから、夏場はアオコが異常増殖し、水は緑色に染まり、悪臭を放っていたそうです。M氏は、今からおよそ二十年前に、この市に移り住みました。

家のすぐそばにある沼は水鳥の楽園として知られ、沼畔近くには鳥の博物館も建っています。春から夏にかけては、ムナグロ、ツバメ、オオヨシキリが飛来し、冬には二千羽前後のカモ類が沼で羽を休める姿を見かけます。



沼周辺の清掃活動を 継続し次世代につなぐ

しかし、目の前のきれいな沼は、かつては日本一汚れた沼であったことを知ったのです。M氏は地球倫理の推進活動に取り組んでいる一人として、居住地周辺を清潔にしていこうと決意しました。そこで、週末になると愛犬の散歩を兼ねて、沼周辺の清掃活動をするようになりました。

数日後、散歩をしていた際、嫌悪感を抱きました。あちこちで犬のフンが道の脇に放置されているのが目に付いたからです。〈犬猫のフンの不始末を許すような心が、湖沼の汚れの一因ではないか〉と考えたM氏。その日から、愛犬のフンと共に、その周りにある犬のフンも取ることにしました。最初は抵抗がありましたが、半年間続けていると沼の周りの草木が喜んでいっているように思えてきたといいます。

ある日、清掃をしていると子供用の野球ボールを踏んだような足の感触がありました。しかし、それは大型犬のフンでした。清掃後の清々しい気持ちは一瞬で消え、へなげ、フンを持って帰らないのか〉と怒りが頂点に達しました。〈地元住民のために取り組んでいるのに、この始末か〉と悲しくなり、その後の清掃活動を中断して沼の脇道を通り過ぎるようになりました。

ところが数カ月後、沼地周辺が悲しんでいるように見え、涙が溢れ出したM氏は、清掃活動を再開することにしたのです。

現在も週末は清掃を継続するM氏。多くの人が住みたくなくなるような地にするため、地球倫理の実践に励んでいます。